

第 21 分科会「里山と都市緑地」

テーマ：貴重な自然体験の場『関さんの森』を残そう！

日 時：2008年4月20日（日）10:00～13:00

場 所：『関さんの森』松戸市幸谷

参加者：86名

スタッフ：山田純稔，川北裕之，関さんの森を育む会



趣 旨

都市緑地は、生物多様性の維持に貢献しているほか、都市住民の憩いの場としてはもちろん、環境学習の場として重要な価値を持っている。しかし、都市緑地（特に民有林）は、残すこと・維持することが大変。本分科会では、松戸市に残された『関さんの森』を会場に、『関さんの森』の現状や、そこに育まれる生き物たちを観察。さらに、森の恵みを味わいながら、都市に残された緑地の価値や維持管理について考える。

内 容

『関さんの森』ウォッチング，タケノコ掘り体験，野草の天ぷら試食，意見交換

現 状

松戸市の『関さんの森』は、屋敷林・梅林・関家の庭・広場・畑など、全体で約2.1haがフィールド。都市化が進む中、「未来の子どもたちのためにこの環境を永遠に残したい」という地権者・関さんの熱い思いで、1995年に1.1haの屋敷林が自然保護団体に寄付され、これがきっかけで『関さんの森を育む会』が1996年に誕生。以来、『育む会』は屋敷林部分の維持管理を中心に活動を広げ、今では梅林や関家の庭はもちろん、周囲の自然環境を考える会として発展してきた。

一方で、周囲から自然が少なくなってきた今、『関さんの森』は地域住民の憩いの場としてのほか、小学生だけでも年間2000人を超える子どもたちの、自然体験の場・環境学習の場として機能している。都市に残された自然は、多様な生物群集を育む場としての価値もあるが、学びの場としての公共的な価値も高いのである。



さて、今回の分科会では、まずは『関さんの森』やその周囲を歩き、その現状や課題を探ることからはじめた。まず目にしたのは、近くまで迫ってきた道路建設現場。この道路は、今から44年前に都市計画決定された道路で、『関さんの森』を分断する計画。道路の公共性と、学びの場や生物多様性の観点から見た公共性、そのせめぎ合いの場である。また、周囲の森が相続によって消滅し、森（屋敷林）のすぐ隣に住宅が建っているという現実。森の落葉・落枝等、実際にあったクレームの例も聞く。さらに、この日は、前日の強風によって森に隣接した駐車場にエゴノキが倒れてい

るのを発見。幸い、建物や車に被害はなかったものの、都市の中に残った森を残すことは本当に大変なことだということを実感した。

屋敷林の周囲は課題が多いが、森の中に入ると、そこは快適な空間。寄付された 1995 年当時は、森は荒れていたが、その後、『育む会』によって多様な生物群集を育むことと、散歩に来た人が快適に歩けるように、維持・管理されている。この日は、ウラシマソウ、ジロボウエンゴサクなどの野草、エナガなどの野鳥を観察した。

次に、参加者は関家所有の別の森『溜ノ上の森』に行った。ここは『溜ノ上レディース』という女性たちによって維持管理されているが、この日はちょうど多数のタケノコが顔を出していた。参加者は、さっそくタケノコ掘りのコツを伝授され、タケノコ掘り体験。掘ったタケノコは関家の庭へ運んだ。

一方、この日、『育む会』のメンバーは、森の維持管理作業とともに、ドクダミ、タンポポなどの食べられる野草を採集して天ぷらに。『溜ノ上の森』で収穫したタケノコとともに、昼食時は森の恵みを味わった。以上、今回の分科会参加者は 86 名だったが、大人から子どもまで、多様な年齢層の人が参加。都市に残された森の現状を見ながら、森の恵みを体験。森の公共的な価値を確認すると同時に、道路や隣接地に迫る住宅の問題など、難しい課題について考えさせられた。



まとめ

都市に残された里山の価値…都市に残された、生物多様性に富む里山は、単に近隣住民の憩いの場としてだけでなく、子どもたちの自然体験・環境学習の場として、きわめて公共性の高い空間である。住宅に囲まれた森の悩み…市街化区域内的の緑地は、相続税の関係で、残すことが困難。また、周辺住民からの苦情が多く、これらの対策が大きな負担になっている。『関さんの森』では、これを分断する道路工事が迫っており、大きな問題となっている。

道路問題のその後

4 月 20 日の分科会后、7 月 21 日には、『関さんの森エコミュージアム』の開設記念シンポジウムが 520 名の参加者を得て開催された。それは、『関さんの森』を生きた博物館として、未来の子どもたちへプレゼントすることを宣言した日であった。

しかし、松戸市は 7 月 28 日になって、道路予定地を強制収用によって取得することを発表。8 月 7 日からは立入調査を強行し、あくまでも計画どおりに道路を建設するとしている。

関家や関連市民団体は、道路建設を反対しているのではなく、公共性の高い『関さんの森』をなるべく大きな塊として残すよう、具体的な道路案を提示しながら、引き続き話し合いによる解決を求めている。環境問題が深刻化する現在、今なお経済優先・利便性の圧力は強い。道路問題で揺れる『関さんの森』の運命は、行政や市民が、都市に残された里山の価値や生物多様性の理念をどのように捉えるのかで、決まるのである。

